



經濟會計

—その軌跡と展望

横浜国立大学教授

合崎堅二編著

中央經濟社

編著者紹介

大正十年、東京に生まれる。府立一商、横浜高商を経て、昭和十八年、中央大学商学部を卒業。中央大学経済学部教授を経て、現在、横浜国立大学経営学部教授、商学博士。

【著書】

「経済会計学序説」(森山書店)、「社会科学としての会計学」(中央大学出版部)、「企業会計と社会会計」(共編、森山書店)、「社会会計——体系近代会計学第十一巻」(編著、中央経済社)、「自由企業制度と会計」(編著、中央経済社)

編著者との
了解により
検印省略

昭和六十一年二月二十日 初版発行

経済会計——その軌跡と展望

編著者 合 あい 崎 ぎ 堅 けん 二 び

発行者 渡 辺 正 一

印刷所 文 唱 堂 ㈱

発行所 株式 中央 経済 社

東京都千代田区神田神保町一—三—二

電話 (二九三) 三三七— (編集部)

(二九三) 三三八— (営業部)

振替口座・東京 〇—八四三三

落丁・乱丁本はお取替え致します

誠製本

ISBN4—481—38177—9 C3034

序

私の処女作「経済会計学序説」が刊行されたのは、昭和三十二年のことであった。この書物は、ヴェブレンの「制度理論」とブレイの「経済会計」を媒介にして、黒澤会計学の根底にある会計観の真髄にせまろうとする摸索の所産であった。それは私のいう「会計学以前の問題」をこえて、会計学の枠組のなかで敢て「経済会計」にとりくもうとする決意を表明しているのであるが、それは、同時に、この研究をとおして黒澤 清先生の学統の一端を担わせていただくとする、ひそかな決意の表明でもあったのである。

そして、この書物が出版されたころ、私はたまたまロンドンで、わずか九カ月ではあったが、ブレイ教授に直接指導をうける幸運にめぐまれた。この個性あふるる学究との出会いは、私自身の「経済会計」研究について「業績の永続性」と「楽しみながら学ぶ」という英国人らしい学問的態度を付加することになったのである。

私の留学した三十二年から三十三年にかけては、幸か不幸か、「経済会計研究」の世界的な退潮期であつて、イギリスでは経済会計の牙城であつた「スタムプ・マーティン講座」の終焉、アメリカではAAA・国民所得委員会の解散など、まさにどん底の状況であつた。この状況は、当然、経済会計の研究を継続するかぎり、私に新しい決意を要求するものであつた。

昭和三十六年、黒澤先生が「社会会計の基礎概念」（企業会計十三卷十二号）のなかで「いずれにしても、わたくしは会計学者が学問の境界領域の開拓者として、社会会計の研究領域に進出しなければならない時機が近づいて

いると思う。会計学は、純粹科学として認められたことは、一度もなく、つねに学界のフロンティヤーでなければならなかったのであり、将来もまたそうであろう。」と書いておられる一文に奮起し、「経済会計」研究の永続性の保持を積極的に意図するようになった。そのひとつは、教育目標として「経済のわかる会計専門家の養成」をかかげ、若い研究者の育成に努力したことである。

こうして、十年足らずの間に出現した若い研究者を核とするいわゆる「社会会計グループ」の共同研究のおかげで、われわれは、昭和四十六年、「企業会計と社会会計」（森山書店刊）、昭和五十五年、「社会会計」（体系近代会計学第十二巻 中央経済社）という二つの成果を公表することができた。社会会計グループにとって最も重要な研究成果と考えられるのは、前者においては、マテシッチ理論にみられるような「ミクロ会計とマクロ会計を含む会計の一般理論の探究」を共通のベースにするという基本的視点を確認したことであり、後者においては、企業社会会計に代表される新しい会計領域への拡大をふまえ「ミクロ会計とマクロ会計の連環の形成」というテーマが鮮明になってきたことであろう。

現在、わがグループの最大の関心事は、国土庁の委嘱による四カ年の「利水合理化調査」をとおしてダムのような社会資本の維持問題や利水コストの負担問題等、ミクロ会計とマクロ会計の接点にある地域社会会計的発想に依拠して解決しようとする諸問題であり、経済会計もようやく市民生活に直結する会計問題に接近しつつある。

本書は、「経済会計学序説」の刊行後三十年の歳月が経済会計の姿をどう変えているか、そしてその展開が会計学研究の将来にとってどういう意味をもつか等の問題を現時点で謙虚に考えてみようという意図をもってわがグループの発意によってまとめられたものである。まさに経済会計の軌跡とその展開の諸相が明示されており、将来、この分野の研究者にとってひとつの基礎的文献になるであろうことを確信できることは、このうえない喜びであ

る。そして、黒澤先生をはじめ「経済会計」の「本論」を期待して下さる方々に対して、こうした形で「本論」を捧げることのできる幸せを心に銘記するものである。

今回は能勢信子教授をはじめ社会会計グループのメンバーにはテーマの選定について特段のご配慮をお願いした。また青柳文司教授には日頃のご理解に甘えて方法論的観点からのまとめをお願いし、小川 洸教授には旧い教え子のよしみで経済会計展開の中心的なテーマについて執筆していただいた。ご執筆の皆さんに対し、深甚なる謝意を表する次第である。また企画・編集の実務を担当された原田富士雄・小口好昭・小関誠三の三君のご尽力に対しては、ただ感謝あるのみである。

本書の刊行を辛抱よく支えて下さった中央経済社の岩佐範雄、長田光雄、小坂井和重、諸兄のご協力に対し、心からお礼を申し上げたい。

昭和六十一年一月

執筆者一覽／執筆順＼

序章	合 崎 堅 二	横浜国立大学教授
第一章	能 勢 信 子	神戸大学教授
第二章	小 関 誠 三	福井工業大学講師
第三章	小 口 好 昭	中央大学助教授
第四章	玉 田 啓 八	中央大学教授
第五章	河 野 正 男	横浜国立大学教授
第六章	小 川 洌	早稲田大学教授
第七章	上 田 俊 昭	富士大学助教授
第八章	矢 部 浩 祥	中央大学教授
第九章	原 田 富 士 雄	中央大学教授
第十章	青 柳 文 司	横浜国立大学教授

序 章 経済会計の歩み

目 次

——経済会計から生態会計へ——

一 社会会計研究における経済会計の位置づけ	1
-----------------------	---

二 ブレイ理論の現代的評価をめぐって	3
--------------------	---

(一) ブレイ教授の追悼出版について	4
--------------------	---

(二) ブレイ理論に対する会計士の評価	5
---------------------	---

(三) ブレイ理論に対する経済学者の評価	7
----------------------	---

(四) ブレイ理論の評価について	9
------------------	---

三 ミクロ会計とマクロ会計——社会会計研究の基本テーマ——	11
-------------------------------	----

四 生態会計の問題	14
-----------	----

(一) 生態会計の構図	14
-------------	----

(二) 水資源の会計	17
------------	----

五 生態会計の学問的系譜	21
--------------	----

第一章 社会会計の誕生	25
-------------	----

一 社会会計の歩み	25
二 資本主義諸国における社会会計の成立と発展	26
三 初期の社会会計の基本構造	31
四 会計的接近の効用	37
五 初期の社会会計が提起した問題点	41
六 社会会計の展望	45

第二章 ブレイの経済会計とフランス会計の展開	49
------------------------	----

一 経済会計の二つの視点	49
二 ブレイの経済会計	50
(一) 経済会計構想の論理	50
(二) 経済会計の勘定設計	52

第三章

SNAの会計的意義

一 会計の社会化

二 SNAの基本構造

(一) SNA成立小史

(二) SNAの基本構造

三 会計的アプローチの意義

三 フランスにおける経済会計と改訂プラン

(一) 経済会計提案の背景

(二) 改訂プランと発展システム

四 余剰分析と経済会計

(一) 余剰分析の基本概念

(二) 余剰分析の狙い

(三) 利力計算書と余剰計算書

五 付加価値概念と経済会計

六 経済会計の役割

第四章

會計評價問題と国民經濟

一 意思決定と情報

二 物価変動と會計上の測定

119 117 117 107 105 102 99 99 99 97 95 94 94 92 91

(一) SNA設計の基本理念

(二) 企業會計との同源性

四 SNA批判——ラグルス体系——

(一) ラグルス体系の位置

(二) ラグルス体系の勘定構造

(三) ラグルス夫妻の接合体系

五 會計学一般理論の探究

(一) 転換する會計観

(二) オークラスト理論の公理体系

(三) マテシッチ理論の意義

(四) 井尻教授の多部門物量會計

六 SNAの拡張と今後の課題

第五章

三 企業会計における評価問題	123
四 経済会計における評価問題	126
五 企業会計と経済会計の関連性	129
地域経済と会計	139

第六章

一 地域経済に関する会計的課題	139
二 水資源開発と会計	141
三 地域経済の自立的発展と会計	149
四 企業の社会的責任と会計	155
付加価値会計と企業の生産性	161
一 付加価値会計と伝統的企業会計	161
(一) 付加価値の意義	161
(二) 二つの付加価値会計論	164
(三) 付加価値計算書の構造	166
(四) 付加価値会計における貸借対照表	167

二 生産性の測定と付加価値	170
---------------	-----

(一) 生産性の意義	170
------------	-----

(二) 生産性の測定	172
------------	-----

(三) 経営指標としての総合生産性	174
-------------------	-----

(四) 問題の総括	179
-----------	-----

第七章 収支的貸借対照表論と社会会計	183
--------------------	-----

一 収支的思考の一つの展開	183
---------------	-----

二 国民経済簿記の意義	186
-------------	-----

三 国民経済簿記と企業簿記	190
---------------	-----

四 国民経済的収支損益計算の基本構造	196
--------------------	-----

(一) 経営経済的収支損益計算の特徴	196
--------------------	-----

(二) 個別記帳上の問題点と損益形態	200
--------------------	-----

(三) 損益決定計算と貸借対照表	203
------------------	-----

(四) 損益分配計算と貸借対照表	207
------------------	-----

五 国民経済的収支損益計算論の評価	210
-------------------	-----

第八章 「質」の測定と社会責任会計

一 「生活の質」と企業観の变革

(一) 「生活の量」と「生活の質」

(二) 企業観の变革と会計哲学

二 生活構造と生活の価値

(一) 生活環境と生活障害

(二) 生活の質と経済学

(三) 社会的責任と会計学

三 社会責任会計と企業の社会報告

(一) 社会問題の解決と人間生活への洞察

(二) 社会責任会計とソーシャル・リポート

(三) 社会責任会計の方法

(四) 先進諸国における社会報告の動向

四 マクロ社会会計とミクロ社会会計の連環

(一) 社会指標と国民の状態

(二) GNPの修正と国民福祉指標

219

219

219

221

223

223

223

224

225

226

226

227

229

230

232

232

234

第九章 経済会計学の未来

——会計システム拡張への対応——

(三) 社会責任会計・社会報告・社会監査	235
(四) ミクロ社会会計としての位置づけ	236

一 経済会計と社会会計	239
-------------	-----

(一) 経済会計学の目的	239
(二) 社会会計の会計的性格と経済会計学の課題	241
(三) 社会会計の三つの発展段階	243

二 「拡張の時代」の成果	247
--------------	-----

(一) SSDSの背景	247
(二) SSDSのデザイン	249
(三) SSDSからの示唆	255
三 システム拡張の二つの方向	258

第十章 会計学方法論の展開	263
---------------	-----

一 先験的研究と経験的研究	263
---------------	-----

二	規範理論と実証理論	266
三	認識論と存在論	268
四	会計学の岐路	270
五	経済会計と方法論	275

序 章 經濟會計の歩み

經濟會計から生態會計へ

一 社会會計研究における經濟會計の位置づけ

經濟會計ということばは、いろいろな使い方をされているので、一義的にとらえることはなかなかむずかしい。たとえば、英国のブレイ教授のように、「經濟学的諸概念に基づく新しい會計デザイン」という特定の意味をこめて經濟會計 (economic accounting) を主張する立場もあるし、A A A・国民所得委員会の『經濟會計概説』(A Survey of Economic Accounting) のように「國民經濟計算 (national economic accounting) の頭のナショナルをとって經濟會計を名乗るケースもある。

もちろん、いずれのばあいでも、經濟會計と称するからには、會計学の立場から經濟學とりわけ社会會計ないし國民經濟計算とのつながりを求めようとする研究であることにまちがいはない。つまり、「概説」の冒頭の一文をかりれば、「企業會計の王国の彼方には、アカンタントによつて探險されてはいても、ひろくアカンタントの住みついていない広大な地域がある。これが國民經濟會計という国であつて、最近の幾十年かエコノミストによつてお